

桃の滴（松本酒造）

長年にわたり、伏見の清らかな湧き水は、市外から酒造家を惹きつけてきたが、松本酒造はその代表的な例である。

この蔵元は、1791年に松本治兵衛（生没年不詳）によって京都の東山地区に設立された。1922年、伏見の純粋な水に惹かれた同社は、高瀬川沿いに2番目の蔵元を設立した。今日、蔵元の背の高い赤レンガの煙突は、伏見のこの地域の有名なランドマークとしてそびえ立つ。

松本酒造は、醸造アルコールを添加せずに製造された純米酒に特化している。特に、「桃の滴」と呼ばれる日本酒が有名で、その名は伝説の流浪の俳人、松尾芭蕉（1644～1694）の俳句からの引用で、「dewdrops of the peach」を意味する。桃の滴は1983年より醸造されている。

1685年、芭蕉は伏見地区におり、親友で西岸寺の住職であり、俳句仲間でもあった任口上人を訪ねていた。芭蕉は友人へ深い敬意を示し、上人の徳を桃になぞらえ、自分の衣に花のしずくを垂れたまえと次のように吟じた。

我衣に ふしみの桃の 雫せよ

芭蕉の生きていた時代、伏見の桃は希少とみなされ、結構な価格を付けた。

芭蕉の俳句にちなんでネーミングすることにより、松本酒造は日本酒に注ぎ込まれた尊敬、謙虚さ、優しさの精神を伝えることを目指している。